

について、南朝梁・沈約や唐・元稹の詩を手がかりに「クモ」と判断したが、より分かりやすい例として、南朝梁・何遜の「劉博士江丞朱從事同顧不值作詩云爾〔劉博士・江丞・朱從事 同に顧みらるるも値わず、詩を作りて爾か云う〕」という五言古詩に、以下のようない句があることに気づいたので、補足しておく。

蜘蛛正網戸 蜘蛛 正に戸に網し
落花紛入膝 落花 紛として膝に入る
《蜘蛛はちょうど戸口の当たりに網を張り、花びらはひらひらと部屋に入り膝もとに落ちる。》

- (2) 「秋の糸を吐く青虫」(『語研ニュース』21号、2009年5月)を参照。
- (3) 詩題の意味は、「子供に仕事を割り当て、家の北にある果樹園の枝や蔓および荒れてきたないものを鋤いたり切らせたりし、きれいになったのでそこに椅子を持ち出した。」というもの。
- (4) 正確な詩題は、「和范景仁王景彝殿中雜題〔范景仁・王景彝の殿中雜題に和す〕三十八首」の其十「宮槐」。
- (5) 「素月」の句は、おそらく月には桂の木が生えているという伝説を踏まえるものと思われる。ここでは、新月から満月へと月が満ちるに従い、月面の桂の木も苗木から徐々に生長する、という方向で解釈してみた。
- (6) 唐・雍陶の七言律詩「秋居病中」の頸聯に、
荒簷数蝶懸蛛網 荒簷 数蝶 蛛網に懸かり
空屋孤螢入燕巢 空屋 孤螢 燕巢に入る
《数匹の蝶が荒れ果てた軒に張られた蜘蛛の網にひっかかり、一匹の螢が人気のない家屋に作られた燕の巣の中に入る。》とあるように、蜘蛛の網にひっかかる蝶を「懸」という語で表現した例はある。また、隋・薛道衡の五言古詩「昔昔鹽」に、
暗牖懸蛛網 暗牖に 蛛網 懸かり
空梁落燕泥 空梁に 燕泥 落つ

《暗い窓に蜘蛛の網がひっかかり、人気のない家屋の梁から燕の巣の泥が落ちる。》とあるように、窓にひっかかる蜘蛛の巣を「懸」という語で表現した例もある。いずれにしても、「懸・掛・挂」は「クモ」と縁の深い語と言えそうである。

色彩の不思議、伊藤若冲の 『動植綵絵』

経営学部

島田 了

ドイツの国旗は何色でしたかという質問をしたらどうだろうか。フランスの国旗なら誰だってすぐに答えられるだろう、青、白、赤だ。いろいろなところで目にするし、さわやかで素敵な印象を与えるから簡単には忘れない。でもドイツはどうだったか、子供の頃小学校の運動会でかかっていた万国旗のなかのどれかだった、でもどれだったかな。確かに日ごろめったにお目にかかるものではない、知らなくたって恥ずかしくもなんともない、わからなければ調べればいいだけだ。手ごろな図鑑、最近ならネットを使えばすぐわかるはずだ。しかしこのとき図版だけを見て答えてはいけない。図版を見れば、上から順番に黒、赤、黄となっている。しかしこれは不正解、文字解説を見れば、黒、赤、金と書いてある、こちらが正解なのである。

あらためて図を見てもどうみても黄色にしか見えない、確かに印刷してあるのは黄色である。じつはこれは、約束事のひとつなのである。紋章学というものがあり、歴史上の王族や貴族の持つ紋章を分類したりする学問がある、また王政をとっている国では紋章を管理する役所もある。たとえ

ば、イギリスには紋章院という役所があり、そこで紋章の管理や新たな紋章の授与を行なっている。紋章の世界には、形や模様など細かな決まりがたくさんあるが、その中で色に関しては、使える色は7色に限定されていて、金属色として金と銀があり、金は黄色、銀は白色であらわす事になっている。ともかくそういう決まりなのである。金の輝きを手ごろな色である黄色で代用して、それで納得しなさいという安易な解決だと思っていた。

しかし最近、ある番組のなかで面白いことを知った。その番組とは、東京の国立博物館で2009年の秋に開催されている『皇室の名宝 - 日本美の華』という特別展を紹介する番組で、そこで伊藤若冲の『動植綵絵』について解説がなされていた。

伊藤若冲は1716年に京都の大きな青物問屋の跡取り息子として生まれるが、絵を描くこと以外に興味を持たず、40歳になると家督を弟に譲って隠居を決め、後は、他の趣味も持たず、酒も飲まず、一人で画業に専念して85歳まで京都で活躍した江戸時代中期の画家である。その画風は綿密な写生に基づいた緻密な画面と大胆な色彩で知られている、近年国内国外を問わず大変人気の高い画家である。

『動植綵絵』は、その鮮やかな色彩美で知られる伊藤若冲が、当時最高品質の画絹や絵の具を使い、10年の歳月を惜しみなくかけて製作した傑作で、鶏、鳳凰、草花、魚介類をさまざまな色彩と形態で描いたもので、全30幅からなるものである。これを若冲が縁のあった相国寺に寄進したものが、のちに皇室御物となり現在宮内庁三の丸尚蔵館の所蔵作として今回の展覧会の目玉の一つとなっている。

この『動植綵絵』のうちのひとつ、1765年から66年ごろにかけて製作された「老松白鳳図」について、次のような解説がおこなわれていた。この絵は『動植綵絵』のなかでもひときわあでやかに白と金色に輝く鳳凰が描かれている。この絵、金粉を混ぜた絵の具、金泥が使われていると長く考えられていたのだが、最近の科学調査の結果金はまったく使われておらず、裏彩色という技法によって裏から黄土という黄色の絵の具が使われている

だけであった。表の白、裏の黄色、絹の輝きの組み合わせがこの鳳凰の輝く美しさをつくりあげていたというのである。実際に比較実験で金泥を使って描いた場合よりも、このようにして黄色を使った方がより金色らしい効果を上げていることもわかった。おそらく若冲も数限りない組み合わせを試してこれだという色を見つけ出したのであろう。

そのほかに彼の研究熱心さを示す例として、ブルシアンブルーという絵の具の使用がある。おなじく『動植綵絵』のなかで一匹の魚にこの絵の具を使っていることが今回の科学調査でわかった。ブルシアンブルーという絵の具は、1704年にベルリンで発明されたもののその製法が秘密にされていたもので、1726年になってイギリス人によってその製法が広く知られるようになったばかりの絵の具でヨーロッパでも広く使用されるようになったのはこの頃のことである。日本では平賀源内が1763年に紹介しているが、そのすぐあとに若冲はこの最新の、貴重な絵の具を使用していたわけである。彼の色彩に対する執念が見えるようである。

その後の、19世紀も終わりのころあるフランスの画家はひとつの教会、あるいは積みわらを描きながら、その刻々と変化する色彩と姿をその多様さにおいて描きとめようとした。

眼に見えている色が本当の色ではないことを明確に主張したのは印象派の画家たちといわれているが、色彩の不思議を知り、その効果を知る人はそれ以前にすでにいたわけである。

そもそも私たちの見ている景色の色彩は、他の国の人々、たとえばヨーロッパの人たちが見ている景色の色彩と全く同じではない、それを照らしている太陽の光が決定的に違うのだから。夏の強い日差しで見る風景と冬の晴れた日の穏やかな日差しの中で見る風景はもはやまったく別物であると感じたことなど、皆さんも経験済みであろう。

これを感覚の頼りなさとして嘆くこともできよう、しかしまたこの色彩の不思議さを自然の贈りものとしてただ驚き感嘆することもできる。

さてもうすぐ訪れる本格的な紅葉の季節、私たちはその見事な葉の色に毎年魅了されているが、紅葉を美しく見せているのは実はその変化した葉

の色だけではなく、秋になって黄金色に傾いた日光の助けも大きいのではないかと思う。今年の紅葉はぜひ光にも注目してみたいものだ。



老松白鳳図

出典:フリー百科辞典『ウィキペディア』

編集後記

『Goken News』No.22の編集後記を書くに当たり、先ず悲しいお知らせをしなければなりません。本年11月9日に現代中国学部 of 英語担当教員であった佐野俊彦先生が急逝されました。佐野先生は愛知大学の教養学部にて赴任された後、愛知大学の学部再編で現代中国学部に移籍され、新学部の発展のために大いに貢献をされました。大学運営の面と英語科目の担当の面で貴重な働きをされてきましたが、中でも4年前に名古屋キャンパスで始まった2006年度新カリキュラムのTOEIC科目の浸透のために活躍をされてきました。英語教員一同のみならず全教員が深い哀悼の思いに包まれております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

次に、悲しいお知らせの後では、嬉しいお知らせも書きたいと思えます。法学部の北尾泰幸先生が本年6月に大阪大学大学院から言語文化学の博士号を授与されました。北尾先生は4年前に愛知大学の嘱託教員として赴任され、3年前に助教として専任教員になられて今日まで愛知大学の英語教育や運営の面において大きく貢献されてきました。博士号取得はまことに嬉しいことでもあります。おめでとうございます。ちなみに、本号の表紙の写真は、北尾先生が今年の夏休みに学会出席のためハンガリーへ出張されたときに撮られたものです。

さて、第22号の『Goken News』の目次を見ますと安藤聡先生のお名前が見えます。安藤先生は、本年4月に大妻女子大学へ移っていかれたのですが、投稿者が少ないかもしれない、と思って筆者が寄稿をお願いしたので、かなり長い玉稿を寄稿してくださって感謝を申し上げます。ロンドンへの初めての旅を振り返りながら、ガドウィック空港やロンドンの地下鉄やロンドン近郊の風景を名文で綴られており、拝読して感激をしました。どうも有難うございました。(A.Y.)